



ピッポ新聞 2002

No.168

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 清水市草薙1-6-3

TEL&FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp/>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

「切れる」若者が多いのは

先日、テレビの台風情報を見ていたら、画面には新宿駅の様子映し出されていて、そこにはアナウンサーの後ろで、Vサインやおどけて見せる若者がおおぜい映っていた。彼らはその仕事草をしながら、片方の手で携帯電話を耳にあっているのである。それが一人ならまだしも、映し出されている若者の多くが携帯電話を耳に当てていたのである。ぼくには、それが何とも異様な光景に見えた。そして、いったい、彼らは羞恥心というものを持ち合わせているのだろうか、と考えざるをえなかった。

何もこのテレビの場面ばかりでなく、こういう羞恥心をなくした若者が近頃やたら目に付くのである。(勿論若者だけでなく、いい年をしたおとなも携帯電話を耳に宛、歩きながら大声でしゃべっているのが結構いますね。こういう大人に、ぼくは一度品性という事について問うてみたい気がする)

そんなとき、ある人から『ゲーム脳の恐怖』

(森昭雄・著)

NHK生活人新

書 660円)

を紹介された。

これを読んで羞

恥心を無くした

若者、「切れ」

や

すい若者が多い原因の一つがこんな所にもあったのかと心寒い思いがした。

この十数年子どもたちの間でテレビゲームや携帯用のゲーム、パソコンを使ったゲームなどが流行している。いや！それどころか、こどもの遊びの主流とさえ言えるのではいだろうか。ゲーム機の制作会社は、あの手この手を用いて子どもたちに売り込みを図っている。その一方で、大人たちは、余りやりすぎるのは「良くないんじゃないか」と、不安を抱いているのである。しかし、どんな悪い影響を子どもにもたらすのかは「目が悪くなる」程度しか具体的に上げることができなかったのである。

この本はまさにそのことを、科学的に解明した初めての本である。脳神経科学者である著者は、脳の働きを示す脳波を簡単に計測できる機械を開発した。あるとき、ゲームソフトを開発している人たちの脳波を測ったら、痴呆性老人の脳波ととても類似していたという。機械の故障かと考えて普通の大人の人の脳波を測ったら測定機は正常な脳波を示し、彼らの脳波の異常性に気付いたというのである。そこで、大学生などの脳波を測っていくと、大変なことが判明していくのである。

著者は脳を四つのタイプに分類して、ゲームをやることによって受ける脳への影響について分かりやすく説明し、その危険性に警鐘をならしている。

「ノーマル脳人間タイプ」このタイプの人は小さいときからゲームなどしたことがなく、テレビもほとんど見ないで成長した人たちで、ゲー

ムをやっても脳は正常にはたらいっている。礼儀正しく、成績も上の人が多かったそうである。

「ビジュアル脳人間タイプ」このタイプは、ゲームはしたことがないが、毎日1〜2時間テレビを見ているような人で、ゲーム中は脳の波が波に接近し脳の働きが低下するが、ゲームを止めると脳波も正常になるタイプ。やはり成績も普通より上位の人が多かったという。

「半ゲーム脳人間タイプ」小学校低学年から大学生まで週3〜4回一回に1〜3時間ぐらいゲームをやり続けると、この現象がでてくるそうである。ゲームをしていないときでも、波と波が接近したり、混じり合ったりして、集中力があまりなく、切れやすいタイプだということである。

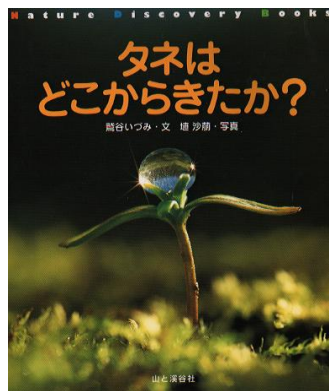
「ゲーム脳人間タイプ」このタイプは小学生低学年から大学生まで週4〜6回一日2〜7時間ゲームを続けている人で、切れる事が多く、他の人と交わることを好まず、普段でもポーツとしていて、集中力もないという。ゲーム中は波が完全といっていくらい消失してしまうそうである。

人間が他の動物と大きく異なるのは考えたり、想像したりすることができることである。意欲、判断、情動抑制など、人間らしさを保つはたらきをする前頭全野という箇所が、ゲームを長時間することで、劣化していくというのである。

先の新宿の若者の羞恥心のなさや、状況判断(台風が接近)ができない理由が、ぼくはこの本を読んで納得したのである。

ねー、この本読んだ？

『タネはどこからきたか?』(鷲谷いづみ・文 埴沙萌・写真 1680円 山と溪谷社)



秋の野原を歩くと、植物の種子が衣服にくっついてきて、

困った経験を誰もお持ちだと思いません。

この本を読むと、そんな植物たちのタネをこちら(人間)の事情だけで毛嫌いです

る事などできなくなのではなんでしょうか。「そう、貴方はそういう理由で、わたしにくっついてきたの。子孫を残す事って大変なのね」などとしたしみを感じ、「がんばれよ!」などと、植物立ちに声さえ掛けたくなるから不思議です。タネは子孫を残すため、様々な方法(例えば動物に食べられることで遠くまで運ばれるなど)で旅をしたり、時には何十年、何百年も芽生えの条件が整うまで耐えて待っているのだそうです。この本は、多くの植物に対しての考え方を大きく変えてくれました。

小学校高学年〜おとな

『アンブラと4人の王子』(アン・ローレンス・文 金原瑞人・訳 1470円 偕成社)



アンブラという聡明で美しい少女と4人の王子の物語 隣国エバーニアの4人の王子はそれぞれ得意分野があります。音楽に長けた王子、

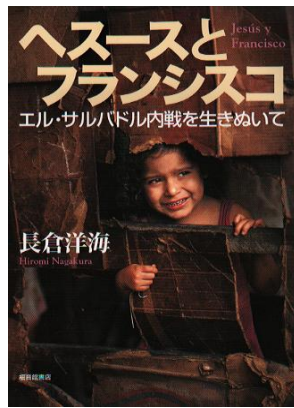
にと・・・アンブラはそれぞれの王子に得意分野を習い、影響を受けます。そして、4人から求婚されるのです。この結婚は政治的な意味合いを持つため、簡単には決められません。そこでアンブラは「すべてを捨て公国の侯爵になつてくれたら」と、提案します。さて、それに答える王子はいるのでしょうか・・・こういう本はとモすのではしょうか・・・ こういう本はとモするとお説教(人生訓)になりがちだが、これは物語としての楽しみを十分備えています。最後にはどんでん返しもありしね。

小学校4年生ぐらいから

『ヘースとフランシスコ エルサルバドル内戦を生きぬいて』(長倉洋海・文と写真 1680円 福音館書店)

報道写真家である著者は1982年、内戦下の中南米エルサルバドルへ取材にでかけた。難民キャンプの人びとの写真を撮っている中で、3歳の女の子ヘースと出会

う。その後、彼は彼女がどのように成長していかを追う。何度もエルサルバドルを訪れ、温かい目で 20 年もの間見守り続けるのである。著者はカメラマンとして戦いの中であつて、センセーショナルな戦闘写真ではなく、一番の被害に遭う貧しい人々の生き様をカメラで撮り続ける。これらの人びとが貧しい中であつて、とても優しいということに希望を見だし、カメラを通じて激励し続ける。



この地球上に今現在も、戦争の被害にあつたり、飢えのため病気で死んでいく子ども、学校へもいけず働く子どもたちがいることを、こういう本を通じて我々の子どもたちに伝えることが必要ではないだろうか・・・。

小学校高学年～おとな

『しらみのルーラー』(クリングス・作 奥本大三郎・訳 1050円 岩波書店)



にわの小さなななかまたちシリーズ第2集全5巻 他にてんとうむし・はえ・まるはなば登場するよ!

山里からの便り

家庭内自然回復論

この春から「お知り合い帳」なるものを付けています。せめて自分の庭に生える植物とお知り合いになりたいと、始めました。木の仲間では梅から草ではオオイヌフグリ。外出先や山仕事中でも花が目につき次第片っ端から表に記入します。6月までは植物もゆつくり花を付けてくれたのが、7月になると、とたんに咲く花が増え。記入が追いつかなくなりました。今、夏の分を遅れながらも記入していますが、既に秋の花が咲き出していますし、大変です。でも、3～4年も続ければ私の生活圏の植物とは大方お知り合いになれるでしょう。

この「お知り合い帳」作りは、なかなか面白い発見があります。4月菜の花の季節ですが、村の畑は黄色い花が一杯です。娘と、その花を一つ一つよく見ていくと、白菜だったり、チンゲンサイや、野菜菜だったり、ブロッコリだったり色々です。これはみんな野菜の花で、アブラナ科の植物だと知って小さな驚きでした。

ハタと考えさせられることもあります。「カマツカ」という名の木があります。この木は山地の林に生える低木で、小さな花を付けるのですが、余り目立たないため見過ごされがちです。花と葉を持ち帰って、調べた結果「カマツカ」という名であることが分かったのです。この名に興味をひかれました。昔はこの木で鎌の柄を作ったそうです。また、この木は別名「ウシゴロシ」とも言うそうです。木の小枝を輪にして、牛の鼻輪にしたからと言う説があります。材の性質は堅くて丈夫、曲げに強いということなので、名前の由来に納得しました。

佐久間雅哉

植物の名前の由来には「スギ」のように、まっすぐ伸びる性質からついたものや、「サルスベリ」のように見た目から付けられた物など色々です。「カマツカ」のように、人間生活に密着したところから名前がつけられた植物はどのくらいあるのだろうと、図鑑をめくりました。形が何かに似ているからと、形状に由来するものと性質に由来する物が圧倒的に多いのですが、結構ある物です。火を起こしたのでヒノキ、弓を作ったのでマユミ、箒にしたのでコウヤボウキなど。農作業、宗教、法律に関係した名もあります。

それで気付いたのですが、昔の人は、山に密着していたけれど、現代人は遠く離れたところにいるんだなあ。山との関係は、余暇の領域がわずかに残って程度ではないでしょうか。鎌の柄を自分でつけ替える人など今はほとんどいないですからね。ホームセンターで安く売っているし、だいた、鎌なんて、家に無い人の方が多いじゃないかな・・・。

時代ということなのでしょうが、何か人間の生活から、自然との関わりが部分が抜け落ちるのは、淋しいと言おうか、危ないんじゃないかなって気がします。自然との関わりは、安らぎを与えてくれるけど、工夫も要求されるのです。自力で工夫して生活していく姿勢が、どうも我々の生活から薄れているようでありません。工夫の無い生活ってのは、他人任せで生活するようなもので、やがては、うまくいかないと他人のせいにする嫌な生活になってしまうのではないのでしょうか。かつては「電化で明るい家庭生活」というキャッチフレーズがありました。今は「家庭生活に自然を」の時代になったかも知れません。

インフォメーション

ピーターラビットの新装版を出版

「ピーターラビットのおはなし」が1902年に出版されてから、今年で100年になるのを記念して、ピーターラビットの絵本シリーズ全24巻が新装丁で出版されました



評論社のピーター・スピアアの絵本6点在庫あり！

評論社から出版されているスピアアの絵本が一部品切れと思われていましたが、全点入荷しています。

- 『雨 あめ』 (1470円)
- 『ノアのはし船』 (1365円)
- 『きつとみんなよろこぶよー』 (1260円)
- 『きつねのとうさんごちそうごちそう』 (1365円)
- 『ああ、たいくつだー!』 (1275円)

『せかいのひとびと』 (1575円) 以上6冊 (訳は松川喜吉さん)

岩波書店の復刊全15冊

すばらしいフェルデュナンド	ルドウィク・J・ケルン・文 内田りさこ・訳	円 2520
村は大きなパイづくり	クレスウエル・文 猪熊葉子・訳	円 2100
サティン入り江のなぞ	フィリップ・ピアス・文 高杉一郎・訳	円 2520
魔法のオレンジの木	D・ウォルクスタイン・採話 清水真砂子・訳	円 2415
雪だるまのひみつ	エインズワース・文 河本洋子・訳・絵	円 1365
ようせいのゆりかご	エインズワース・文 河本洋子・訳・絵	円 1350
グッデイさんとしあわせの国	エインズワース・文 河本洋子・訳・絵	円 1350
はらぺこオオカミがんばる	キャサリン・ストーリー・文 掛川恭子・訳	円 1470
まだまだはらぺこオオカミ	キャサリン・ストーリー・文 掛川恭子・訳	円 1470
しあわせのテントウムシ	アルフ・ブリョイセン・文 大塚勇三・訳	円 1365

床下の小人たち	メアリー・ノートン・文 林容吉・訳	円 2310
野に出た小人たち	メアリー・ノートン・文 林容吉・訳	円 2520
川をくだる小人たち	メアリー・ノートン・文 林容吉・訳	円 2310
空をとぶ小人たち	メアリー・ノートン・文 林容吉・訳	円 2310
小人たちの新しい家	メアリー・ノートン・文 猪熊葉子・訳	円 2520

10月24日発売予定 予約受付中!

「ばあやのお話かご」は26日開催
 今月は久しぶりに宮崎さんのお話を開きます。
 ぜひおいでください。午後2時からピッポでやります。

来月号に2003年のカレンダーを特集いたします。近くホームページにも内外のカレンダーやアドベントカレンダー(ドイツ)の紹介をアップする予定ですから、注目しててください。カレンダーのご注文も全国へ発送いたします。

編集後記

山仲間から、恒例の秋山登山に誘われ、釣り仲間から源流ヘイワナの放流にと声を掛けられたがいずれもパス。奴らは今頃、鹿の恋の歌を聴きながら山小屋で酒を飲んでいるのだろうか。いきていな オレも!